知事と県民の意見交換会（鹿角地域振興局）議事要旨

- テーマ : 鹿角地域における農産物生産振興について
- 日時 : 令和4年7月12日（火）13:00～15:00
- 場所 : 【視 察】 ぶどう畑・小坂七滝ワイナリー
【意見交換】 小坂鉱山事務所

- 参加者 : A氏 （小坂七滝ワイナリー）
B氏 （小坂町地域おこし協力隊）
C氏 （小坂町ポテトコントラクター）
D氏 （有限会社沢田青果 取締役）
E氏 （果樹サポーター育成講習修了生）
F氏 （りんご・きゅうり農家）

佐竹 敬久（秋田県知事）
今川 聡（鹿角地域振興局長）

視察

ぶどう畑及び小坂七滝ワイナリーを視察。

知事挨拶

市町村長や団体の会長との会合では業界全体のことを伺っているが、やはり現場で働かれている方の話を伺わないと現場の実態を把握することは難しい。皆さんの現在の取組やこれからの展望、行政への要望などをお聞きして、政策へ反映していきたい。

今年のテーマは農業や食の問題、あるいは農業と6次産業化についてだが、地域の特産をどのように展開していくかということは地域の発展につながることでもある。この3年間、食品産業、飲食業、観光業は非常にコロナの影響を受けている。現在第7波ということで、感染者が大分増加しているが、これではきりが無い。これまでのように行動制限をあまり強くするという事はできないので、どうやって付き合っていくかを考えることが重要である。まずはこの夏に向かって観光施設をどのように運営していくか。

また、現在の日本は円安の心配もある。昔の日本は外貨がたくさんあったため、海外から食糧を輸入したことで飽食の国だった。全体での食品ロスも非常に多かった。しかし、現在は円安の影響で輸入品の値が上がり、簡単に購入できない状態である。こうした状態で、日本の食糧自給率は37%という状況である。そのためこれからますます食糧や食品について自給や国内生産を進めていく必要がある。この点から農業は日本において非常に重要な産業になる。そのため今年は食、あるいは食品産業や農業などを意見交換会を通じて重点的に聞いている。

地域産業については、同じ地域内の産業について、地域で全然連携がとれていない、地元住民に知られていないということがある。鹿角地域の例で言えば、花輪のお菓子屋さんが比内地鶏の卵を購入したところ、近くの家でいっぱい余っていたという話がある。知っていれば次回はその家から卵を購入してお菓子を作る、ということにつながる。そのため、

こうした場で様々な組合せの方に集まっていただくと、新しい仕事生まれることもある。こうした中での意見交換は非常に良いことだと考えているので、本日は皆様の体験談、悩み、これからの展望などをお聞かせいただきたい。

参加者紹介

(A氏)

小坂七滝ワイナリーでワイン醸造に携わっている。以前は、北海道で飲食業に従事していたが、縁があり秋田にUターンした。現在は醸造担当者として、醸造技術を学びながら、製造全般、販売接客など、様々な業務に従事している。

(B氏)

神奈川県出身で現在、小坂町の地域おこし協力隊を務めている。今年4月に着任し、ぶどう畑、ワイン醸造、ワイナリーの案内など、事業の全般の多岐にわたる活動をしている。

(C氏)

あきた菜の花ネットワークとの縁から農業に携わり、平成23年度に農業法人を設立し、大型機械を用いた経営をしている。

小坂町加工用馬鈴薯試作協議会には、立ち上げのときから参加し、カルビーへの出荷のほか、大豆、そば、菜種などを栽培している。

(D氏)

有限会社沢田青果の取締役を務めている。仲卸業を営む傍ら、平成28年から、りんごの自社栽培を開始し、栽培できなくなった方の園地や、何も作っていない園地を借り受け、拡大を進めている。

(E氏)

平成30年度果樹の栽培技術を学ぶため、県かづの果樹センターで実施する果樹サポーター一育成講習を受講した。今年から本格的にりんご栽培に取り組み、普段、SNS等を活用し、全国の農家の方々と交流しながら、作業販売を手がけている。

(F氏)

J Aきゅうり生産部会で役員を務めている。埼玉県出身で結婚を機に鹿角に移住した。5、6年ほど前から農業に本格的に取り組み、りんごときゅうりをメインに栽培している。

意見交換（前半）

(局長)

それでは皆様から、取組内容や課題、その中で感じていることなどを1人2分程度でお話しいただきたい。最初にAさんからお願いします。

(A氏)

小坂七滝ワイナリーでは、2017年からワインの醸造・販売を行っている。17年から始まり、一昨年、昨年、今年とコロナ禍ではあったが、現在、何とか順調に販売の質と量は更

新できている状態である。ワイナリーの取組の中には、ワインの醸造・販売だけでなく、農家さんの所得、ワイナリーでのワインの販売、そこからつながるワインツーリズムなどがある。ワイン・ぶどうを目的として小坂町に来ていただき、小坂町に宿泊・観光体験するといった、ワインを中心にして小坂町の観光産業が盛り上がっていくような、そういう取組を今行っているところである。

今年の4月から、知事にも先ほど来ていただいた、ワインの直売所の販売も始まり、お客様からも大変好評をいただいている。県内外問わず、ゴールデンウィーク中はかなりたくさんのお客様がいらしていた。県内は、まだまだ他の盛んな県に比べて日本酒がかなり強く、ワインの盛り上がりは非常に低いところにある。そういった中で、ヤマブドウやヤマブドウ交配種等の品種のワインを作っているという、小坂町の独自性やワインの魅力などを、もっとたくさんアピールしていきたいというのが現在の取組である。

先ほど知事からお話があったが、今起きている円安の影響で、海外の輸入ワインはこれからもっと高くなることが予想される。最近であれば、ボジョレーヌーボは去年の二倍の価格になるというニュースが出ていた。そういった中で国内の原料を使って、国内で製造される日本ワインというのが、もっとこれから注目される。円安というのは、そのきっかけにもなると思っている。県内での認知度の向上から、県外、更に大きい産業になっていくようなことができればと思っている。

(局長)

次にBさんをお願いします。

(B氏)

元々は神奈川県出身で、母親が小坂町の出身だったことから小学生の頃夏休み等によく遊びに来ていたため、小坂町に馴染みがある。神奈川県にいたときは生花店で勤めており、そこで最初は花の栽培に興味を持った。秋田県であればとダリア、ストック、キンギョソウなど。そういった栽培の仕事を探していたところ、母親の出身の小坂町で、ブドウ栽培を本格的に取り組み始めていて、なおかつワイナリーの経営をしているということを知った。小坂町に去年来て、小坂七滝ワイナリーのワインを初めて飲んだときに、非常においしいと感じ、自分でもこのぶどう栽培を、母親が育った町の小坂町でやっていけたらいいなと思い、地域おこし協力隊に応募した。着任して、まだ3か月しか経ってないが、Aさんを始め色々な方からサポートいただき、慣れない土地ではあるが住みやすい町だなと思っている。

ワイナリーが今、年2万本生産しており、今後は2万5000本、そして5万本、10万本と、どんどん倍々に生産量を上げていく目標を持っている。こういった事業はむしろ県内やその町出身の方よりも、県外の方のほうが興味があると思う。そこで人手不足ならないように、そういった方たちに僕みたいな形で来てもらい、ゆくゆくは小坂町に定住して、一緒に小坂町を盛り上げていけたらなと思っている。

(局長)

次にCさんをお願いします。

(C氏)

元々県内の運送会社に勤めており、そこであきた菜の花ネットワークというNPO法人の取組を前代表がやられていた。その前代表にドライバーを降りて農業の仕事や、バイオ

燃料を作る部門で頑張ってみないかと言われたことがきっかけで農業生産法人を作った。ちょうどそのとき、耕作放棄地事業という秋田県にいっぱいある無利用地を解消する事業があり、そこで今までやっていた機械などを導入し、今大体200haほど開墾して実際180haくらいの畑を作付けしている。今年でちょうど11年目になるが、農業をやってみてすごく大変だと思ったのは、秋田県は気候が6～7か月のスパンで、雪解けからスタートしてもうそれで決めなきゃいけない。最初から大型機械を導入して、人数を少なく、オペレーター4、5人で200haを回さないと農業経営が成り立たないなと思ったのが現状。実際北海道はそのような感じでやっていて、それに近いことは秋田県でもしてるつもりだが、やっぱり大変だと感じる。

今、小坂町の方に営業所を作り、町と一緒にしながらじゃがいもや菜種、そばを輪作体系で回しているという状態。売り先は、じゃがいもはカルビーさん、大豆は関東の方のお店屋さんとか、そばは大手製粉会社、それを直接自分達で販売するようなルートでやっている。あとは、これから米。今おいしいお米も出たが、秋田県でもちゃんとこういう畑作が出来るんだよということを自分なりに、畑をやってもらおう農家さんを増やしたいというアピール活動もやっていけたらと思っている。

(局長)

次はDさんをお願いします。

(D氏)

沢田青果では加工用りんごを主体としたりんご栽培を行っている。現在、りんごの収穫ができる成木園地が約5ha、新たに植え直した園地が約4ha、今後新しく植えるための更地の園地が1ha、合計約10haの園地を現在管理している。新たに植え直したりんごの樹は紅玉という品種で、とても酸味が強く、熟を通しても型崩れしにくいりんごのため、主に加工用に需要が高い。加工用のりんごを作るきっかけだが、地元鹿角に新化食品株式会社という会社があり、6年程前に会社の方からこれから先、りんご栽培する生産者がだんだん減ってくるという寂しい現状がある中で、加工会社で使う原料の調達が非常に難しくなるのではないかということで、鹿角管内で加工用りんごを栽培してくれる生産者さんを探してくれないか、という相談があった。それで、たまたまその時期に、私どもの会社の方でもりんご栽培を始めたという経緯があり、そちらを説明したところ、それでは沢田青果さんで加工用のりんごをどんどん園地を広げていってくれないかという話になり、当社と新化食品さん、鹿角市の農林課の担当者さんと三者でいろいろと協議し、進めていこうという話になった。

加工用りんごについては今全て借受けしている園地になっている。鹿角管内でも年々りんごの栽培を辞められる方がいるので、そういう方々から園地を借り受け、私どもで作業のしやすい園地に整備し植え替えをしているというのが今の現状である。そういう面でも微力ではあるが、そういう方々の受け皿という形にもなっているのかなというふうにも思っている。ちなみに紅玉、新たに植え直した初めての園地が来年度初収穫ということで、約40aほどではあるが、初収穫の予定となっている。

(局長)

次にEさんをお願いします。

(E氏)

20年前に、東京で美容師をやっていたが、親の実家がこちらで遊びに来たときに今のりんご農家の夫に出会い、りんご農家の嫁になった。義母と2人で一緒に農業をやっていたが、基本的な専門知識がなく、きちんと習いたいと思い果樹サポーターを受講した。

普段はSNSを利用してTwitterやスペースを使い、宣伝をしたり、鹿角市の風景や作業風景、日常の気がついたことや、農作業の素晴らしさなどを情報発信している。全国の農家さんと意見交換や物々交換をしたり、刺激をいただいたり、作業の効率や、空調服・剪定ばさみなどの農業に関する道具の情報交換などについての会話を普段からしたりしている。

(局長)

最後にFさんをお願いします。

(F氏)

26年前に夫と結婚して鹿角に来た。元々主人のうちできゅうりとりんごを生産しており、最初は手伝いという形でスタートしている。その後、子どもを出産したり、義父母が亡くなったりと介護や育児をしながら農作業を覚えて、ずっと同時に進行してきた。

きゅうりにしても、りんごにしても作業は1年に1回ずつなので今年で26回目になる。まだまだわからないことはたくさんあるが、今は私が主になって作業しているので、手伝いをしていたときよりは十分見えてくるものがあると思っている。

大変だと感じているのは、この26年の間に生産者もりんご畑も大分減ってきている中で、農業だけでは生活していけないという状態で、次の世代に伝わっていけばいい方だという状況。うちも夫は兼業農家であるため、農家としてはとても規模の小さいものになっているが、それでもやらないと生きていけなかったのも、夫に関しては二足のわらじ、私はそのサポート、どうしても金銭的な面で余裕がないときは、私も畑だけではなくてパートに出ながら畑をして子育てをしてという、もう体が三つぐらいは欲しいなという時期もあった。そんな中で、やっぱり農業だけでなんで生活していけないんだろうなということを感じていた。

(局長)

参加者の中で、他の方に伺ってみたいことがある方はいないか。Fさんはどなたかいないか。

(F氏)

ポテトコントラクターのCさんに、大変だった作業というのは、大型機械の導入以外にどういったことがあったのか伺いたい。

(C氏)

私たちが運用始めたときは、畑に木があり、それを切ってバックホーで抜根して、そこから土壌改良するまでの作業が一番大変だった。畑も何十年もやっていないと、土が硬く、1,000万円ぐらいの機械の刃も3日ぐらいでボロボロになってしまうような状況だった。その状況を県の方で偶然見えて、農業生産法人を作ったらと御指導いただき現在に至る。

(知事)

じゃがいもは今カルビーの方で足りないといっている。今じゃがいもの調子がいいのではないか。

(C氏)

じゃがいもはいくらでも作ってくれという状況である。生食用にもチャレンジしており、秋田丸果さんのところに出荷するキタアカリ、あとは問屋などに卸す分も今年から頑張っ作っている。

(知事)

話は少し違うが、学校給食には意外と地元産が少ない状況である。いろいろと批判を受けるが、学校給食で一番使うじゃがいもと玉ねぎは県産品が少ない。それをものすごく植えているのが茨城。あと、ワインや食糧で言えば海外から入ってくる物は高くなるので、円安のときはプラスになる。

(C氏)

実際取引しているお客さんも、大豆を他から買ってでも集めてくれと言ってきている。そういった注文を運送会社の輸送コストをかけずに直接仕入れることでコストを下げてやれているので、何とか会社として間に合っている状況である。とはいえ、余裕はないので、他の仕事もしている。

(知事)

Bさんはこっちに来てからどれくらいになるのか。

(B氏)

今年の3月に来た。

(知事)

最初は気候も習慣も違うと思うが戸惑いはなかったか。

(B氏)

子どものときから夏休みなどに来ていたが、一番は言葉が分からないこと。段々慣れてきて、聞き取れはするが、その発音がやっぱり体にしみついていない。これから発音とかを覚えていけば、もっとかわいがってもらえるだろうと思う。

(知事)

私は全国の会議のときに、人に会ったときに何を言っているか分からないと言われた。発音ではなくて、単語そのものが違うから。

Fさんはもう26年になるけど、旦那さんがこっちの人で一緒になったのか。

(F氏)

元々は夫も千葉で就職していて、私の父と夫とが同じ会社に勤めていたので知っていた。成人してから再会する機会があり、一緒になってこっちに来たという形。

(知事)

最初は戸惑ったのではないか。

(F氏)

戸惑ったところではない。それこそ言葉がわからない。家での葬式のとくに人がいっぱい見えて、そこで「玉菜取ってけろ」と言われて、私は乳飲み子背中に背負って、「すみません、玉菜ってなんですか」という状態から入っていった。もちろん言葉も分からなければ人も分からないし、親戚関係も全部こっちにいるわけではないので。

(知事)

今の若い人達は十分共通語だけれども、私の年代はまだ玉菜と言う。

(局長)

Dさんにお伺いする。大体の加工用りんごは、大産地で傷になったり、割れたりしたものを集めて加工用にしていったという状況で、青森県から来るものがほとんどで、なかなか秋田県では集まらないという話を、以前新化食品さんから聞いた。それで加工用のりんごを育てるとなれば、生食用よりも手入れを少し省いてもできるということがあるのか。

(D氏)

加工用というとカット・ジュース用というイメージがあると思うが、私どもが今作ろうとしているのは、缶詰用という、りんごの皮を剥き、芯を抜いて、味付けをしてある程度カットした状態のもの。最近よくあるのがコンビニなどで売っているパンにりんごの入ったものなどに使われる原料である。私どもが加工用を作るに当たり、正直、普通の生食用のりんごを作るのとほとんどまず同じ。薬の回数や摘花、間引きををするのも同じだが、最終段階の色づけについてはある程度省ける。よくスーパーに売っているりんごというのは、本当に色が良くて、形も良くてというもの。私どもは色などに関しては、まず一切考えなくてもいいということなので、最終段階だけはある程度省ける。新化食品さんでも年間約4,000tぐらいカットしているが、私どもも当初の目標としては、大体200tぐらいを生産したいと今現在は考えている。

意見交換（後半）

(局長)

次にそれぞれ今後の展望や目標、将来の農業の未来に向けて日頃思っていることなどを伺いたい。

(知事)

県への要望があれば是非言ってほしい。要望がないと施策がない。同じようなテーマで開催すると結構どこに行っても同じ悩みで同じような要望が出る。どの地域でもそれで困っているということは県としてできる。その地域だけだったら市町村でやる。逆に私の方は悩みというか行政との接点になるような情報が一番欲しいので遠慮なく言ってほしい。

(局長)

それではFさんからお願いします。

(F氏)

私の家は小規模農家なので、認定農業者ではないというところから、いろいろな補助の枠組みからどうしても外れてしまう。そういう農家こそサポートする仕組みが必要と日々感じている。例えばりんごの改植で言えば、10a以上改植しないと補助金が出ない。でも、うちは30aしか植えていないので、10aも改植してしまうと逆に収入がほとんどなくなってしまふ。5本10本とか、空いたところを毎年植え替えしているが、補助は一切受けられないので自己開拓するしかない。きゅうりにしても同じ。大きい農家には補助が使える機会はあるが、兼業農家として規模を大きくできない分、その人たちに農家として、補助が何か少しでもあればいいと常日頃感じている。

また、うちには子どもが3人おり、全員高校で農業科に通っていたが、それでも農業を職業として選択する子はなかなかいない。どの子に聞いても職業として農業はあるけれどそれは最終手段だと考えているような状況になっている。そういった現状を何とかしなくてはいけないのではないか。農業で48歳が若手だと言われるのは、やっぱり違うと思っている。50近くだともう次の世代へバトンを渡して、次の子達を育てなくてはいけない年齢に来ているが、その次の世代の子たちが育ってこないとなると担い手として、どんどん畑が少なくなっていくのは当然である。他から来ると言っても、地元の子たちは働く場所があって収入が得られて、自分の生活を成り立つことができればやっぱり地元に行きたいと思う。そういう形をもっと増やすためには何ができるのか。現状だと畑をやりたいって言っても、支援するにしても、タイミングが合わないとその支援が受けられないという問題を私も目の前にしてきている。そういう現状があると、若い子たちが一歩が踏み出せないの、そこを何とかしたらいいのにと、常日頃思っている。

(局長)

Eさんをお願いします。

(E氏)

私は20歳過ぎくらいに鹿角に来たが、当時働く女の人は皆綺麗な格好してキラキラした状態の中で、私は農作業のドロドロとした格好で、保育園にお迎えに行っていた。そのときに、よく農業なんてやってるねと言われていたが、その言葉が20年経っても心の中に残っている。今は若いから分からないけど、年をとって結局農業という手に職みたいな感じのものを持っていたら自分は強いだろなと思う。SNSを始めたきっかけが、農家の汚いとかきついというイメージを変えたいと思ったこと。作業服も明るい色を身につけたりとか、こんな服着ると虫が来ないとか通気性いいよ、という情報をアップしたりしていったのがきっかけである。

農業をやっていると一人で孤独に感じることもあるが、Twitterの「農家と繋がログ」という、生産者と消費者が意見交換をするスペースで、全国の農家さんと地域活性化の話をしている。いろいろ勉強になることもあれば、土地によって考え方もやり方も違うが、農業をやっているということにつながりを持てるし、あの人が頑張ってるから私も頑張ろうという感じになって、助けられているのですごく刺激になっている。

今目標としてるのは、私ができる目の前にある作業を地道に地盤を作って、毎年1年生だとよく農家さんに言われるが、それを基本に初心を忘れないで、頑張っていきたい。

(局長)

Dさんをお願いします。

(D氏)

今現在進めている園地拡大をまだまだ広げていく予定。園地の拡大と共にわい化での園地を早急に整備するというのが初期の目標である。園地を整備したら今度は機械を入れたいというふうにも考えている。りんごは非常に手間のかかる品目なので、機械を使ってスマート農業、省力化というのをどんどん進めていって、できる限り園地を整備して機械を使えるところは機械を使っていくということを進めていきたいと思っている。

現在は、昨年購入したロボット草刈り機を今シーズンから入れている。簡単に言うと、家庭用であるロボット掃除機のルンバタイプの草刈り機を、今シーズン一つの園地で使っているが、一切手がかからない。手をかけなくても勝手に草を刈ってくれるというのが非常に良かったので、今後そういうのも導入していきたいと思っている。それから、何年先になるかは分からないが、りんごの自動収穫機もいろいろ開発されていると聞いているので、完成したときには購入して導入していきたいと考えている。

先ほどFさんから、若い人がいないという話があったが、その件については私どもも非常に考えている。今現在私どもの会社が私を入れて3名、あと代表が1人いる。私がもう少しで50代になるが、その下が今年40になる、その下が今年30になると、その3人でやっている。やはり若い人たちの働き先ということで、自分達が今やっている、会社勤めしてりんごをつくるという取組を中高生等々にいろいろ説明して、興味を持ってもらって新規の雇用につなげていければいいのかなと考えている。面積の拡大、人材確保と農業機械の購入等々で、現在も秋田県や国、鹿角市等から、いろいろと御支援いただいているが、これからもいろいろチャレンジしていきたいため、御支援、御指導の方よろしくお願ひしたい。

(局長)

Cさんにお願ひする。

(C氏)

さっき皆さんが言われたとおり後継者不足、若い世代でやっぱり農業をやる方がなかなかおらず、運送会社の方から引き抜いてきたりしていたが、やっぱりそういう問題は考えていけないといけないと思う。自分は、田んぼ半分は減反で作れないので、そこにじゃがいもなどを植えて、新しい作物の取組をどんどん進めていった方がいいのではないかなと思う。

基盤整備も広い面積で、1.5haか2ha、それとあと3ha、4haくらいの田んぼにして、大きくした方が機械の効率が速い。大型機械で人も少なく、早くやる。九州や北海道は最初からそういうふうには作っているのだから、秋田でもそういう畑や田んぼを作ってもらいたいと考えている。そうするとどんどん、他のこともやりやすくなると思う。

また、機械が高いのでIT化を進めていく上で元を取るのに10年、20年かかる。そういう補助率をよくしてもらいたいという気持ちがある。

(局長)

続いてBさんにお願ひする。

(B氏)

今は小坂町の地域おこし協力隊として、ぶどう栽培のことを一つ一つ学んでいる。先ほども言ったがワイナリーで今後規模を大きくしていくにつれて、原料となるぶどうが不足

したら話にならないので、ワイナリーの仕事をしながら勉強してぶどう栽培をしていきたい。最初にぶどう農家としてやっていきたいと話したところ、ぶどう農家だけでは無理だと説明を受けたので、例えば高齢でもう譲ってもいいという方がいたら、そこを譲り受けて兼業農家として、原料も作りながら生産加工もしていきたいと思っている。

(局長)

Aさんをお願いします。

(A氏)

以前秋田県立大の生徒さんがきて、ぶどう農家の見学、小坂七滝ワイナリーの取組の見学をしたときに、ぶどう農家をやってみたいと話している生徒さんもかなり多かった。大学の研究室単位でのそういった実証研究の取組などを実際の農地を使いながら行って、大学生と農家さんをそのまま直接結び付けられる取組があれば、将来的にそのまま継続していけるのではないかと感じた。受け入れる農家さんや体制・予算の面などもあると思うが、若い方にどう農業に対して意識を持ってもらうかということにつながると思う。

大学を卒業して北海道に行ったが、北海道は北海道というブランドがものすごく強く、北海道にいながらも北海道産のものばかり意識するようになっていた。秋田に帰ってきてから、秋田県民が秋田県産を意識する機会が北海道にいたときに比べると少ないと思った。なので、生産者と消費者が秋田県産ということに対して、喜びや信頼というか、そこに価値があるような、そういう機会があればいいと思った。自分は5月の末にあった秋田市のイベントに小坂町のブースで出店させていただいたが、そのときに他の市町村のブースを回ってこんなことやっていたのかという驚きをすごく感じた。なので、秋田県内で秋田県内のものを知る、消費者と生産者がちゃんとつながるような機会やイベントなどで、作る側の苦勞と、そうして生産されたものだという価値が消費者にちゃんと伝わるような仕組みがあれば、秋田県の農産物としてのブランドの価値はもっと上がっていくと思った。

そういった中で、生産物の価値が上がったときに2次加工であるワインづくりや他の商品の価値も、付随してどんどん上がっていくことになっていくと思う。

(知事)

まず最初に小規模農家、特に中山間地はやはり県南とは大分違う。県央と県南はメガ団地も相当多い。例えば、ほうれん草で言えば農家がまとまって5haほどで作っている。中山間地の小規模農家、この対策をこれからどうするか。国も県も大規模農家は支援しているが、中山間地は農地の集約もなかなかできない。今の制度の中では狭間となっており、これをどうするかが非常に大きな課題になっている。国の方は農業の効率化を進めているが、食糧の確保という面で見るとこれからは効率化だけでない。地域によっては様々な品目がある。長野では一般的に作られていない高冷地でないと作れない品目を作っている。ここでのポイントは小規模農家が連携することで、ある程度の収穫量を確保していることである。こうした小規模農家をどのようにするかということについては非常に問題意識をもっている。

あと、今後はますますスマート農業に対する支援は広がってくると思う。畑作、果樹は田んぼと違って、まだスマート農業もそんなに導入していないがこれから相当進んでいく。

県もスマート農業の普及には力を入れているので段々そういった面は広まってくると思う。

基盤整備の方は、水管理が関係あるのでそこも地域によって違う。ただ、基盤整備その

ものは本県は北海道の次に予算がついているので、これは相当進んでくると考えている。
話は変わるが、私が日曜日山形県の酒田市で平田牧場のとんかつ屋に行ったら一時間待ちだった。連日満員だとのこと。ポークランドさんのとんかつ屋はあるのか。

(A氏)

ポークランドの直営の飲食店はないが、ワイナリーの隣に加工施設があり、精肉販売している施設が小坂町の中にある。

(知事)

ポークランドの社長に言ってポークランドの豚のとんかつや豚の料理を出す店をどこかに作ったらいい。そこでワインを出す。問題は、この地域に一個だけでもこれだと言うものがないこと。湯沢にいけば稲庭うどん、大館はきりたんぼというような食べ物のイメージがここにはない。農業やりんごなどの果樹等いいものはいっぱいある。しかし、観光にきて食べるもの、そのあたりで何かないか。

(A氏)

今小坂町のワインツーリズムの中では、大館は比内地鶏、鹿角は鹿角牛や小坂町で豚もやっているの、そこに合わせて食事とワインをパッケージにすることを考えている。

(知事)

県南の方は農家民宿、農家レストランなどが非常にたくさんある。そこがけっこう流行っている。鹿角小坂地域に来たときに、そこに行って何を食べるか、というイメージがない。この点でいいところは例えば羽後の道の駅のうご牛のコロッケ。1個で240円の商品が一瞬ですぐ売り切れる。ほかにもジェラートやそばなどもある。観光でいえば、景色をみる観光は当たりがない。景色はどこにもある。今はグルメ。グルメは極端でなければみんな買っていく。その点が県南と県北の大きな違い。県南はどこに行っても食べ物の名店がある。超一流ではなく、普通の町の食堂に車50台並ぶ。鹿角は行けばいいものはいっぱいあるので、そこをどのように盛り上げたらいいか、その辺の商売っ気が県南と違ってない。県南はものすごく食べ物と観光が、がちと組んでいる。鹿角は行けばいっぱいあるけども、外への情報発信が全くない。だから県南の人は県北のことを何も知らない。その辺を非常に私は残念だと思っている。

(局長)

振興局としては引き続き技術指導とともに国、県、市町の助成事業を提案していく。また、雇用の面では、高校生への企業説明会などでお手伝いしていきたい。

知事総括

今、正直な意見を伺ったところだ。これから様々なことに頑張っていただかないといけないが、最後に強いのは食である。何があっても最後まで農業は生き残る。食べ物を作っていくことは最後の砦、秋田県は農業県なのでこれをどう守るか。これが今県政の一番大きな柱となっている。いろいろと課題もあるが希望を持ってがんばってほしい。(了)